



11月の進路関係行事

- 1 (日) 大学別模試・進研駿台共催マーク模試③
[10 / 31(土)~]
- 3 (火) ● **文化の日**
- 5 (木) 県高校芸術文化祭開会式
- 6 (金) 火曜日授業
- 7 (土) 土曜課外①②
土曜講座①
登校学習会②
大学別模試③ [~ 8(日)]
- 13(金) 生徒懇談期間①②
[10 / 27(火)~]
模擬裁判①
- 14(土) 公開授業・保護者会①②
- 15(日) 土曜課外①②
土曜講座①
登校学習会②
大学別模試③ [~ 16(月)]
- 16(月) 11 / 14(土)の代休
- 19(木) 月曜日授業 科目登録締切日
- 20(金) 県民の日
- 21(土) 土曜課外①②
土曜講座①
登校学習会②
小論文講座③
- 23(月) ● **勤労感謝の日**
- 27(金) サイエンスフォーラム②
- 30(月) 第4回定期試験
[~ 12 / 3(木)]

※○数字は学年を示します

＜大学入試センター試験に本校3年生275名が出願＞

9月29日(火)～10月9日(金)の11日間、大学入試センターでは、平成28年度大学入試センター試験の願書受付が行われました。本校では、9月24日(木)に受験希望者275名から提出された出願書類を各クラス担任及び進路指導部で確認した後、10月1日(木)に無事出願を済ませました。

今回の入試は、**新学習指導要領の完全実施に伴う新課程初年度**に当たります。3年生は、一つ上の50期生とは異なり、文系教科を含めて全て新課程の下で行われる入試に臨みます。10月8日(木)には、本館2階の日めぐりカレンダーが**大学入試センター試験までの残り日数を100日**と刻みました。

3年生の中には、これから国公立大学の推薦入試に挑戦する者もいますが、いずれの手段で受験に臨むにしても、皆さんの「力」が問われます。やがて来る「大学生活」を様々な視点から捉える言葉はありますが、やはり**大学は「学問をする場」**…。その場に見合う「力」を持って高校を卒業してもらいたいと願っています。それを試す指標の一つが大学入試センター試験…。**「倦まず、弛まず、たじろがず」**…3年生の皆さん、頑張ってくださいね。

＜ノーベル医学・生理学賞を本県出身の大村智氏が受賞!!＞

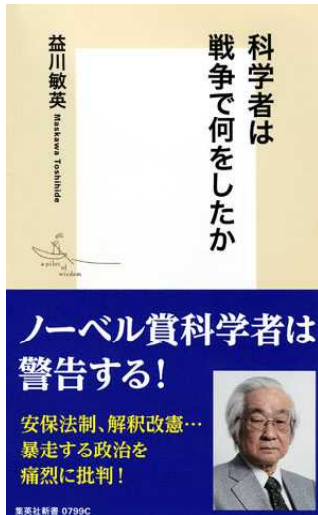
10月5日(月)、今年のノーベル医学・生理学賞に北里大学特別荣誉教授の大村智氏の受賞が発表されました。大村氏は山梨県韮崎市生まれの80歳。**山梨大学学芸学部(現在の教育人間科学部)を卒業**し、東京都で定時制高校の教員を経験した後、東京理科大学大学院に学び、研究者の道を歩まれた方です。今回の受賞は、「土中の微生物によって引き起こされる重大な感染症の治療法発見」の功績を評価されたものでした。

今回の受賞が発表される前日、私は偶然、「サイエンティストライブラリー」というサイトで大村氏のインタビュー記事を読んでいました。これによると氏は、スキー選手として国民体育大会の出場経験を持つそうで、(謙遜でしょうが…)「学業の方はまったくの低空飛行だったが、何にでも面白がって取り組むので先生方には可愛がられた」と自らの学生時代を振り返る中で、「**山梨大学在学中に地質学教室の教授から『卒業して5年間で勝負』とアドバイスされたことが心に残る**」と語られていました。

いつも村のために尽力した**父親を尊敬**し、感性を伸ばすことを大切にしてくれた**母に感謝**し、面倒を見てくれた祖母の口癖「情けは人の為ならず、巡り巡って己が為」を挙げて、自らの人生は**“祖母の教えを実践”**してきたものと語る大村氏。「人の役に立ちなさい」と教えてくれた祖母の言葉が、「研究の分かれ道に出会ったときに、どちらに進むかの判断基準になっていた」という大村氏の人生観は、**馬場錬成著『大村智－2億人を病魔から救った科学者』(中央公論新社、2012)**からもうかがうことができます。

今回、大村氏は受賞後のインタビューで「研究者として一番大変な時を支えてくれた」と16年前に亡くなった奥様を労われました。大村氏の受賞で、日本人のノーベル賞受賞者は23人。本県出身者にとっては初めての快挙。「**山梨**」という**土壌が産んだ偉人に心からの敬意を表したい**と思います。

<南高生に読んでもらいたい一冊>



益川敏英氏は、2008(平成 20)年に小林誠氏とともにノーベル物理学賞を受賞した日本を代表する理論物理学者の一人です。素粒子のグループの一つであるクォークが、当時3つしか存在が知られていなかったことに関して、自然界に3世代(6種類)存在すると仮定する学説(小林・益川理論)を発表しました。この理論の正しさが後に実験で確認され、その功績を評価されたことが受賞理由でした。同じ年に南部陽一郎氏がノーベル物理学賞を受賞したことを喜ぶ一方で、自身の受賞については「大して嬉しくない」と述べて、周囲を驚かせたことを記憶している人もいるかも知れません。

その益川氏が著したのが『科学者は戦争で何をしたか』(集英社新書、2015)…。今年7月に発刊されたばかりの本です。5歳のころ、名古屋の自宅で受けた空襲の記憶を踏まえた上で、「**科学の進歩は何の批判もなく歓迎されてきたが、本来、科学は『中性』であり、使う人間によって平和利用も軍事利用も可能となる。そのことを科学者はもちろん市民も認識しなければならない。**」と説きます。そして、ノーベルやアインシュタインなどの稀代の科学者の頭脳でさえも例外ではなかった、過去の戦争における“科学の利用”について検証しています。

「はじめに」の中で紹介された、益川氏の恩師坂田昌一氏の書(益川氏の研究室に掲げられているそうです)「**科学者は科学者として学問を愛するより以前に、まず人間として人類を愛さなければならない**」の一文と、「あとがき」に記された恩師坂田氏の「**科学者には現象の背後に潜む本質を見抜く英知がなければならない**」という言葉に触れる中で、理系志向の強い本校の生徒にはぜひ読んでもらいたい一冊であることを感じました。

<「科学」の成果を享受されるに相応しい社会を目指して>

9月下旬、連日のように新聞紙面やテレビ画面を賑わせたのは「安保法案」でした。このことの是非を早計に語ることはできません。しかし、歴史は常に「結果」の上に成り立っているもので、「時代の当事者の多くは“どのような結果が待っているか”を知り得ない」状態で生きているという現実を忘れるべきではありません。後になって「あのときが…」などということがないようにしたいものです。

このようなことを書くのは、シルバーウィークも最終日を迎えた**9月23日(水)の山梨日日新聞の1面**にあった「**軍事可能研究に16大学／防衛省初公募**」「**学問の自由／侵害懸念も**」という見出しが気にかかっているからかも知れません。

“軍事技術への応用が可能な基礎研究に研究費を支給する”という防衛省の公募が初めて行われ、採択されると最大で年に3千万円の研究費支給が見込まれるのだそうです。防衛省の示した主な研究テーマは、いずれも破壊行為に直結する研究ではないものの、先の大戦の反省から、長らく軍事研究に距離を置き続けてきた大学で、今回、「直接的な軍事研究でなければ(大学の)応募は許容される」という見解が目立つようになったことを、私は聊か懸念します。

「科学」の力は我々の生活を豊かなものにしてきました。しかし一方で、**デュアルユースの問題は常に存在し続けることを考えると、「科学」の成果はまさに“諸刃”**であることを多くの人々がしっかりと認識することが必要だと感じます。

手にするのは、あくまでも我々。「科学」の成果を享受されるに相応しい社会を目指して、次代を担う皆さんには、我々以上に、繊細な視点と確固とした社会観を持つために学んでもらいたいと願います。